一正月

元日朝拜御節供式○中略

次御强飯三升返升

〔春日社司中臣祐重記〕壽永三年甲辰正月一日、辛卯御强飯物○若宮供御二ケ度、一度殿下拜

〔古今著聞集十相撲强力〕佐伯氏長はじめて相撲の節にめされて、越前の國よりのぼりけるとき、近江國高島郡石橋を過侍けるに、きよげ成女の川の水をくみて、みづからいたゞきて行女有けり、○中略女うなづきて、あぶなき事にこそ侍なれ、王城はひろければ、世にすぐれたらん大力も侍らん、○中略彼節の期日はるかならば、爰に三七日逗留し給へ、其程にちとりかひ奉らんといへば日數も有けり、くるしからじと思ひて、心のとゞまるまゝに、いふにしたがひてとゞまりにけり、其夜よりこはき飯を多くしてくはせけり、女みづから其飯をにぎりてくはするに、少もくいわられざりけり、始の七日はすぎて、えくひわらざりけるが、次の七日よりは、やう〳〵くいわられけり、第三七日よりぞうるはしうはくひける、かく三七日が間よくいたはりやしなひて、今はとくのぼり給へ、此上はさりともとこそ覺ゆれといひてのぼせけり、いとめづらかなる事なりし、

〔類聚名物考飲食一〕をばな色のこは飯

この事よくもしれぬ事なり、薄のあくにて染るなどもいへれど、是もしるしとすべきこともなし、尾花栗毛などいふ馬の毛色なども有をおもへば、うす赤き色なるべしとおしはかる、南史の任昉が傳に、唯有桃花米廿石といふこと有、これも色によりての名とぞ思はるゝ、また留青日札に、桃花飯言飯紅潤之色といふによれば、これらやあたるべきに似たり、されどもいかなるわざをして色をつくるにや、また自らなる色かもしるべからず、或人は今此方にていふトウボウシといふ米は赤き物也、それをいふかともいへれど、思ふにすべて西土の米は我國の如きはすく